

**小中一貫教育導入に向けた持続可能な小中連携
—教職員の小中連携の意識を高める組織づくり—**

専門支援部研修課研修班 長期研修員 金指 和之

1 主題設定の理由

今日の少子化や社会の情報化、グローバル化に伴う家庭や地域社会の変化、価値観の多様化や人間関係の希薄化等、児童生徒を取り巻く社会的な環境が変化中、学校では、いじめや不登校、学習意欲の低下や学校生活への不適応等の課題が増加している。こうした中、「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編」では、「小学校教育までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され、義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を、生徒が確実に身につけることができるよう工夫すること。」と、小中連携の重要性が示されている。また、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では、「9 年間を見通した新時代の義務教育の在り方」について示されており、「義務教育の目的・目標を達成する観点から、小学校 6 年間、中学校 3 年間と分断するのではなく、9 年間を通した教育課程、指導体制、教師の養成等の在り方について一体的に検討を進める」ことが求められている。

研究協力校の河津町立河津中学校は、現在全学年が 2 学級で生徒数 140 人の小規模校である。河津町立河津小学校は、昨年度 3 小学校が統合し、1・2 年生が単学級、3～6 年生が 2 学級で児童数 233 人の小規模校である。

河津町では、令和 5 年 12 月、保護者や地域の代表者、学識経験者、幼小中の園長・校長等 15 人の委員からなる河津町文教施設検討委員会が立ち上げられた。同委員会では、令和 13 年度までの、新たな校舎で義務教育学校又は小中一貫型の小学校・中学校設立に向けた検討を進めている。

令和 5 年度の河津小・中学校が連携した教育活動は、小学校教職員による中学校の授業参観、6 年生児童による合唱コンクールの見学及び入学説明会の参加にとどまり、学校間の継続的な交流はそれほど行われていない。

そこで、学校と保護者や地域が一体となって小中一貫校の本格的な準備を進めていく前に、教職員の小中連携意識を高めていくことが重要であろうと考えた。小中連携の効果や課題を明確にし、教職員の小中連携意識を高めたり、効果的に連携を進めていくための組織の在り方を検証したりすることは、全国的にも学校の統廃合や小中一貫校が増加していく見通しの現在において有効ではないかと考え、本研究のテーマを設定した。

2 研究の目的

持続可能な小中連携の在り方を検討し、小中連携活動の実践を通して生じた小・中学校教職員の意識の変容を分析・考察することで、小中連携の意識を高める組織の在り方を検証する。

3 研究の方法

- (1) 学校組織マネジメント及び小中一貫教育に関する文献・先行事例から小中連携の在り方を探り、研究協力校と知識を共有する。
- (2) 研究協力校の教職員に事前質問紙調査を行い、小中連携に対する意識や現状を把握し、研究協力校と共有する。
- (3) 研究協力校において小中連携部会を設置し、効果的で持続可能な小中連携について構想を立てる。
- (4) 実践及び事後質問紙調査を行い、前後の比較から教職員の意識の変容と要因を調査し、その結果を分析・考察することによって、小中連携の意識を高める組織の在り方を検証する。

4 研究の内容

(1) 文献及び先行研究による必要な視点の整理

ア 小中連携の目指す方向性の共有

Barnard (1963) は、組織の成立要素を、共通目的（構成する人々からの共通目的の容認）、協働意欲（協働体系に対して努力を傾けようとする人々の意欲）、コミュニケーション（共通目的と協働意欲を結びつける手段）とした（図1）。

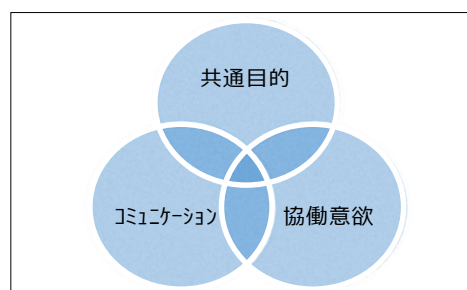


図1 組織の成立要素

Barnard の理論を参考にすると、小中連携が組織の活動として成立するためには、小中連携の目指す方向性を共通目的として共有し、コミュニケーションを通して連携を図りながら、目的達成のために貢献しようとする教職員集団であることが求められる。

イ 持続可能な小中連携に向けたR-PDCAサイクル

文部科学省の「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」（2016）では、「小中一貫教育の構想に当たっては、小学校の教職員と中学校の教職員の議論により、共通認識を醸成するプロセス」の重要性について強調されている。

中川（2017）は、組織として成果を上げていくためには、Research（調査）→Plan（計画）→Do（実践）→Check（点検・評価）→Action（修正）といったR-PDCAマネジメントサイクルが効果的であると指摘している。

これらのことから本研究において、小中連携に対する教職員の意識を高め、持続可能な取組にしていくためには、R-PDCAマネジメントサイクルを小中学校の教職員同士の対話により進めていくことが効果的であると考えられる。

(2) 事前質問紙調査と分析

教職員個人や教職員集団がどのような意識をもって小中連携を捉えているか、研究協力校の小・中学校教職員34人を対象に事前質問紙調査を行い、それらの回答を分析することで、実態や課題を把握した。回答は各質問に対して「1 はい」「2 いいえ」の2

段階の選択形式、又は「6 よく当てはまる」「5 当てはまる」「4 どちらかという
と当てはまる」「3 どちらかというと当てはまらない」「2 当てはまらない」「1 全
く当てはまらない」の6段階の選択形式、又は記述形式とした。

ア 小中連携の目指す方向性の共有に関する分析

事前質問紙調査「①私は、『学校教育目標』を意識して教育活動に取り組んでいる。」
という項目では、6段階の回答の6～4の合計（以下、「肯定層」という。）の割合が
97.1%であった。また、「②私は、『河津町が目指す子ども像』を意識して教育活動に
取り組んでいる。」という項目では肯定層の割合が85.3%であった。しかし、「③私は、
昨年度、小中連携に意欲的に取り組んだ。」「④私は、小(中)学校の教育目標を知って
いる。」という項目における肯定層の割合は、③が32.4%、④では17.6%となり、①、
②の項目と比べると肯定層が少なかった。このことから、町や学校が目指す子ども像
を意識して教育活動を実践している教職員は多いが、小中学校の連携や接続を意識し
て教育活動を実践している教職員は少ないことが分かった（図2）。

また、「小中連携を充実させるために大切だと思うことは何ですか。」という記述形
式の項目から「教職員が連携の必要性を理解すること」「よく話し合い、全職員が共通
理解をして活動に取り組むこと」という回答が得られた。これらの回答から、研究協
力校の教職員は、小中連携の必要性を明確にし、情報を共有しながら連携を図ること
を求めていると推察される。

そこで、小中連携を推進していくためには、研究協力校の教職員が小中一貫教育制
度の特徴や河津町の動向について共有した上で、連携の目指す方向性を検討していく
ことが重要だと考えた。さらに、検討によって出た意見や提案を両校と共有し、共通
理解を得ながら連携を進めることも重要であると考えた。

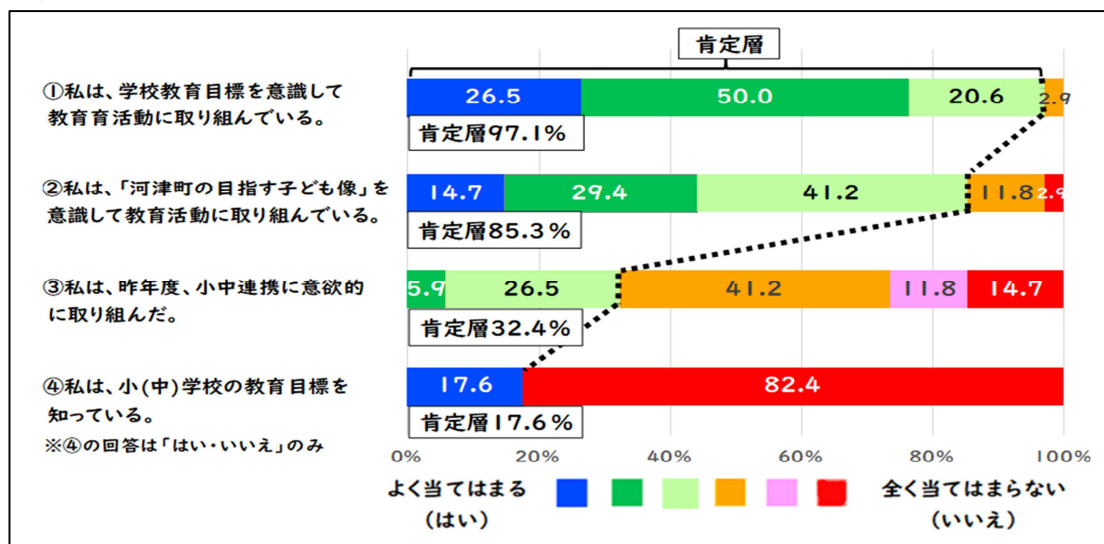


図2 事前質問紙調査の結果（目指す方向性の共有）[N=34]

イ 小中連携の実践意欲に関する分析（持続可能な小中連携に向けて）

事前質問紙調査「⑤小（中）学校の教職員と連携してみたい。」「⑥小学生と中学生
を交流させてみたい。」「⑦小中一貫型の学校に移行するまでに児童生徒が交流を進め

ていくことは有効である。」「⑧小中一貫型の学校に移行するまでに、小・中学校の教職員が連携を進めていくことは有効である。」という項目では、肯定層がいずれも80%を上回り、小中連携に対する関心の高さが推察される。しかし、「⑨私は昨年度、小（中）学校と連携した教育活動を実践（計画）した。」という項目では、肯定層が44.1%、「⑩小・中学校で連携することは、教職員にとって負担である。」という項目で、負担だと感じている肯定層の割合が67.6%であった（図3）。

また、「小中連携の課題は何ですか。」という記述形式の項目では、「忙しいこと」「教職員同士の連携をとる時間が取れないこと」「児童生徒にとっても教職員にとっても負担になりやすく、気軽に連携がしにくいこと」「小中連携のイメージがあまりもてないこと」という回答が得られた。これらの回答から、研究協力校の教職員は、小中連携の効果的な実践例、メリット・デメリット及び負担感の大小を知ることによって小中連携のイメージの明確化が必要であると推察される。

そこで、研究協力校の教職員が、先行研究を参考にそれほど大きな負担とならずに行える小中連携を実践し、その効果や課題を共有していくことが重要ではないかと考えた。

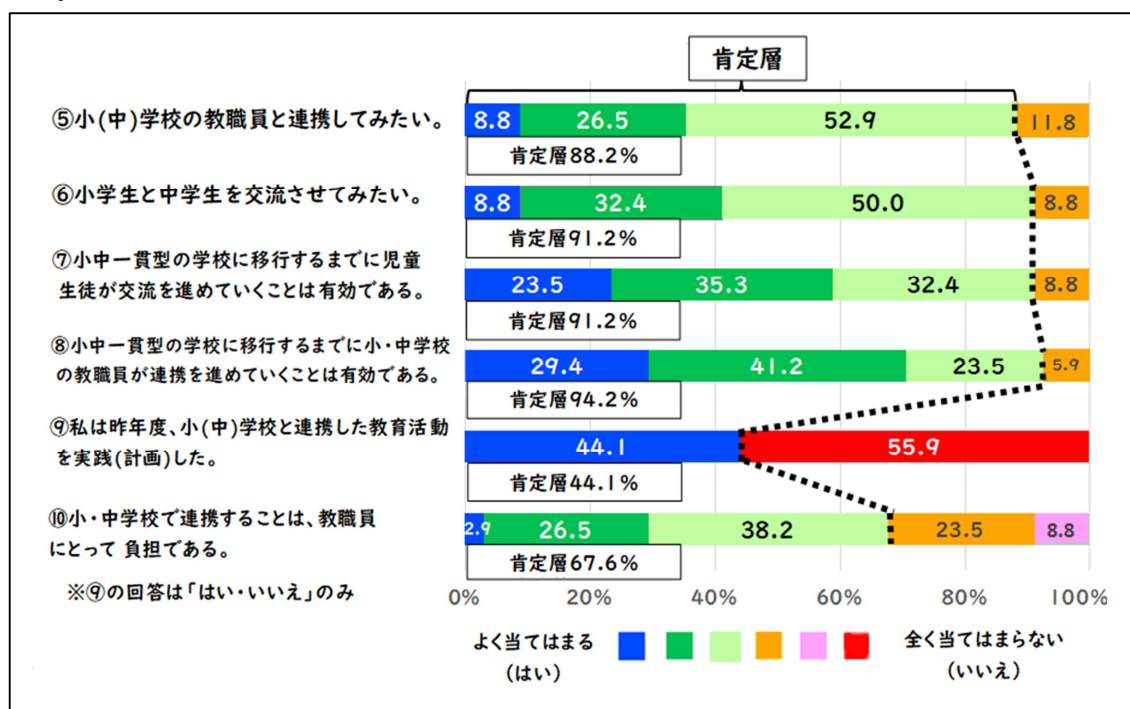


図3 事前質問紙調査の結果（小中連携への意識）[N=34]

(3) 研究の構想

本研究では、持続可能な小中連携を目指してR－P D C Aサイクルを意識した連携推進の取組を実践していく（図4）。はじめに、小中連携に対する実態把握を目的とした事前質問紙調査と、小中一貫教育制度や河津町の動向について共有するための校内研修を実施する（R）。次に、4つの小中連携部会（教頭・教務部会、学習・研修部会、生徒指導部会、特別活動部会、〔以下、「各部会」という。〕）を立ち上げ、小中連携を推進していく。「前期小中連携部会」では、各校の目標や取組の共有、実践可能な小中連携につい

て検討を行う（P）。その後、各部会が提案した連携活動を実践し（D）、「後期小中連携部会」で、実践について振り返ったり（C）、次年度の取組について検討・修正したりする活動（A）を通してR－PDCAサイクルを進め、その効果を検証する。

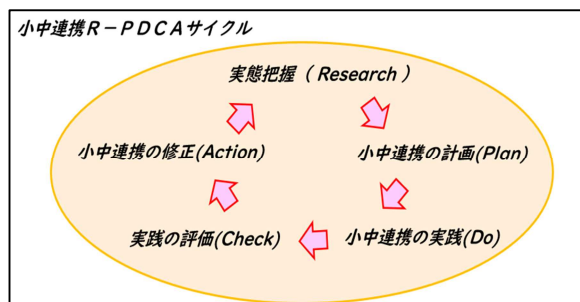


図4 R-PDCAサイクルのイメージ

ア 小中連携の目指す方向性を共有する仕組み

校内研修では、河津町が小中一貫教育導入に向けて動き出していること、小中一貫教育が求められる背景や制度の詳細、先行事例における小中一貫教育導入の成果や課題及び今年度の小中連携の目的と方向性を小・中学校の全教職員と共有する。

次に、両校の主任や担当者を中心とした「前期小中連携部会」を開く。参加人数は、授業の調整等による学校や参加者の負担を減らすために、両校2名ずつとする。部会では、各校の取組について情報を交換した後、各部会における連携可能な取組について検討していく。事前質問紙調査の「小

学校と中学校で実践可能な連携は何ですか。」についての回答を整理した小中連携シート①（図5）と、事前に各校で話し合いを行い、意見をまとめるための小中連携シート②（図6）の活用を提案し、学校ごとに事前検討をした上で、各部会が小中連携について検討することにより、多くの教職員の意見が反映できると考える。

連携部会後には、「小中連携通信」を発行し全教職員が常に小中連携についての進捗状況を共有することで、小中連携の方向性をより意識することができると考える。

イ 持続可能な小中連携を実現する仕組み

持続可能な小中連携を実現するためには、R－PDCAサイクルを進めることが重要であり、実践に対するCheck（点検・評価）やAction（修正）は欠かせない。しか

小中連携シート① 小中学校で連携できそうなこと（質問紙の回答より）			
教頭・教務	学習・研修	生徒指導	特別活動
小学校 ○教育課程、教育目標等の相互理解 ○各校の行事や体験活動の中から一歩でもできることについて話し合う ○小中の連携を図るために協力し、それぞれの長所を生かす ○行事内容や教員の役割 ○日程確保 ○学校教育目標を共有する	○総合・外国語 ○総合的な学習のまとめ発表を見せよう ○中学でのまとめ発表を見せよう ○ペア学習 ○小中連携研修、連絡を見せよう ○行事計画やカリキュラムの検討 ○情報について（タブレット管理の仕方や活用について） ○外国語や理科などの教科を小中を跨いで専門的な教員が教えるなど ○総合的な学習の時間の計画 ○中学生による読み聞かせ ○作品展やノート展などで互いのよさを知らせよう ○生徒指導や学習指導に関する統一したルール作りなど ○特別授業 ○授業参観 ○授業交流 ○地域学習 ○体育指導 ○図工 音楽	○特別支援に関する指導 ○長期目標にそった継続・徹底 ○生徒指導 学校のきまり ○生活指導 ○特別支援 ○交流給食・中学生の食育指導 ○児童・生徒の生活指導情報共有 ○生活指導や学習指導に関する統一したルール作りなど ○不登校対応	○行事内容の検討 ○児童会活動 ○避難訓練の実施 ○児童会・生徒会が取りさつ運動 ○川のクリーン作戦 ○遠足などの行事 ○運動会や持久走大会 ○部活動 ○地域での体験活動の共有 ○行事の交流 ○お互い応援しやる心を育てる ○行事への参観や参加 ○運動会 ○ボランティア活動 ○合同の行事をする
中学校 ○小中連携の必要性の周知 ○連絡調整 ○新入生説明会での中学校の説明 ○学校のルール ○小中教員の話し合いを通して小中が連携した姿について、両校の先生（目標や意図）を共有 ○専門性や役割の分担のあり方 ○通知表や要諦の所見等の形式の統一 ○欠席連絡システムの統一	○6年生に中学校の家庭学習を紹介する ○教科（理科）のつながりがある指導 ○小学校も教科担任制を導入する ○英語のテストの受け方 ○書写指導 読書指導 ○合同で校内研修を行う。互いに授業参観を行う ○資料の出版授業 ○学習のきまりを小中中で合わせる ○英語科として、小中連携したアクティビティができるのではなかろうかと考えている。（今年度の夏休み実施予定） ○最終のフォーミングアップや体育的行事を合同で行う ○英語の授業一部活の紹介・行事の紹介 ○日々の学習指導 ○学習や生活のきまりをできるだけ合わせる ○学習意欲向上のためのチャレンジテスト ○出前授業 ○講義 ○交流授業 ○情報交換	○生徒指導 ○学習や生活のきまりの共有 ○情報交換 ○生徒指導、特に生徒の生活面でのルール・約束について共通理解を図り、生徒が充実した学校生活を送れるようにしたい ○挨拶、言葉遣いなど基本的な生活習慣の定着 ○読書や言葉遣いについて ○保護者や家庭環境調査等の連携の統一など	○合同のボランティア活動 ○部活動部活動体験 ○ボランティア ○書写交流 ○情報交換 ○生徒会と児童会の連携 ○行事を合同で実施する ○運動会などの行事 ○部活動 ○行事を見に行くなど ○体験運動や行事への参加

自分の教科や分掌（役職）で連携できそうなこと
自分以外の教科や分掌（役職）で連携できそうなこと

図5 小中連携シート①

小中連携シート②（ ）部

連携部会のゴール（目的）
 情報共有、実践（計画）をもとに来年度も持続可能な小中連携の計画を作成する。

目指す教員の姿（目標）
 授業や部会で実践（計画）する教育活動と小中連携との関連について明確化できる。

【小中連携について】

①今年できそうな連携について

②今年は難しいが、いずれできそうな連携

図6 小中連携シート②

し、研究協力校の小・中学校は、設置場所が離れていることや授業準備、部活動指導等で忙しく、話し合いの機会が容易にもてない現状がある。そこで、小中連携の実践について振り返りを行うために、ウェブ上で回答可能な「小中連携振り返りシート」を提案する。シートは、担当者が工夫した所や今後の改善点、担当者以外の教職員の感想等を簡単に記録できるようなものとする（図7）。

また、次年度の小中連携につなげるために、「後期小中連携部会」を設置する。「小中連携振り返りシート」を活用し、事前に各校の部会で連携に対する評価や次年度の連携について検討した上で、「後期小中連携部会」を開くことにより、より多くの教職員の意見を反映できるようにする。話し合いや実践を通して連携していくよさを実感した小・中学校の教職員同士が、自発的にR-P-D-C Aサイクルを進めることで持続可能な小中連携となることを期待する。

(小中連携) 振り返りシート 河津(小・中)氏名	
【河津町の目指す子ども像】 自ら学び、自ら考え、判断し、進んで行動できる子ども ・確かな感性 (自他を認め、共に磨き合う力を育てる) ・確かな学力 (夢をもち、共に学び合う力を育てる) ・健やかな心身 (体を鍛え、共に高め合う力を育てる)	
連携内容または活動、参観した授業等 月 日 () 実施	
感想など	
次年度に向けて (特になければ未記入)	
連携や実践に関わった先生だけでなく、参観した感想など気軽にコメントしてください!! ※右のQRコードからも回答できます。組織師は教頭先生に提出してください。	

図7 小中連携振り返りシート

(4) 実践と検証

ア 小中連携の目指す方向性を共有する仕組みについての実践と考察

事前質問紙調査では、連携のイメージがもてないことや負担増加等の課題が挙げられたため、6月の校内研修では、今年度の小中連携の目標と共に、小中一貫教育制度の概要と実施による成果や課題及び河津町の小中一貫教育導入の動向について共有した。また、連携を進めていくことは、児童生徒にとって教育効果が期待でき教職員にとっても指導の改善につながることを、さらにできることから進めていくことで大きな負担とならないことも方向性として確認した。

6・7月に行った「前期小中連携部会」では、参加した教職員の感想に肯定的な意見が挙げられた（図8）。今まで互いの取組について詳しく知らなかった教職員が、各校の取組について情報を交換したことで、発達段階による指導の違い、共通している部分、これから共通して指導していけるとよい部分等の共有ができ、今後の連携に効

【前期小中連携部会の感想】

- ・今後も連携を深めていきたいです。
- ・特別活動として、**お互いの校種で何をしているのかを把握することができた。**その中で、同じような活動や、小学校での取組を中学校でさらにブラッシュアップできるのではないかと感じた。今年度の話し合いをきっかけに、小中の連携をより深めていきたいと感じた。
- ・少し話をしただけでも**連携できる部分をたくさん見つけることができた。**
- ・小学校の先生とは、授業研究のように限定的な話しかしたことがありませんでした。今回、**じっくりと情報交換や意見交換ができました。**中学校の生徒が落ち着いているのは、小学校の先生方の指導があつてこそだと、強く認識しました。中学生として成長した姿を、小学校の先生に見ていただいたり、**これから入学する子どもたちを見たりする機会を全教職員がいただけたら、河津の子を育てるという共通目標に向かって、チームとなって頑張れそうな気がしました。**

図8 「前期小中連携部会」の感想（小中連携振り返りシートより）

果的な話し合いとなったことが推察される。情報交換の後に行った小中連携についての話し合いでは、小・中学校それぞれの視点から多くの意見が挙げられた(図9)。小中連携シート①と②を用いて各校で事前検討を行ったこと及び他地区の先行事例をまとめた資料を提示して話し合いを行ったことの成果だと考える。

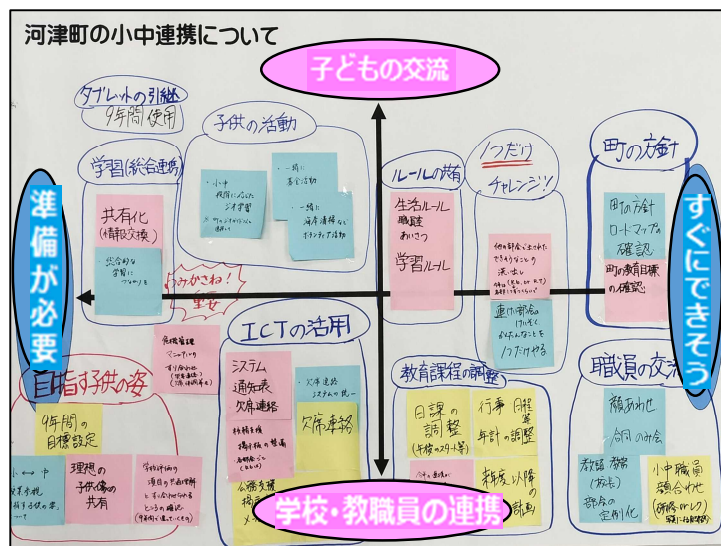


図9 小中連携についての話し合いのまとめ

「前期小中連携部会」では、小中連携の中心部会である教頭・教務部会の実施回数を増やすこと及び次年度以降も教頭・教務部会を定例化していくこと、各部会で、「一部会一実践」の連携活動を行うことが決定した。校内研修や連携部会の後には、「小中連携通信」を発行し、部会で提案された小中連携の進捗状況や具現化する方法を共有した(図10)。

「小中連携通信」の発行後には、「小中連携振り返りシート」に「部会の内容がわかりやすくまとめられている。」といった小中連携通信の内容を評価する記述に加え、「すぐにできることから始めていけるとよい。」「小中の連携をどんどん進めていきたい。」「小学校の授業を見に行きたい。」等の感想が挙げられた(図11)。その要因として、「前期小中連携部会」で話し合われた連携の方向性について、「小中連携通信」によって小中学校の全教職員と共有したことで、各部会に参加していない教職員においても小中連携を推進していく意識を高めるきっかけとなったことが推察される。

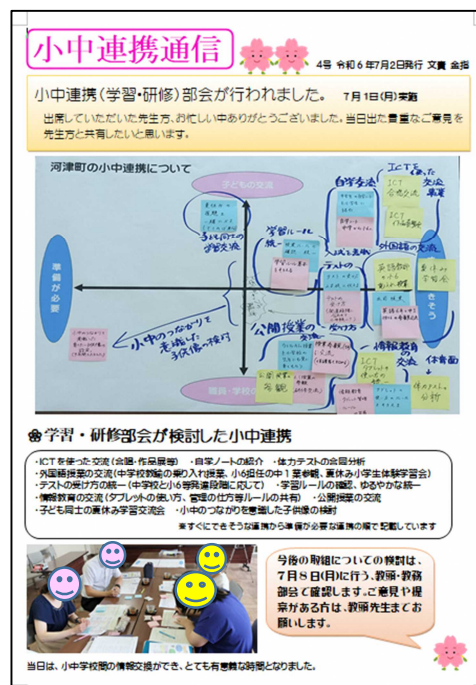


図10 小中連携通信

【小中連携通信の感想】

- ・部会の内容がわかりやすくまとめられています。
- ・すぐにできることから始めていけると良いと思います。
- ・小中の連携をどんどん密にしていきたいです。
- ・小学校の授業を見に行きたいと思っています。
- ・授業参観や出前授業をたくさん設けられるとよい。
- ・小中の教育課程が違うことを理解しながらできることからスタートできればと思います。

- ・連携してできそうなことが結構あると思います。
- ・小中連携通信より、目指す子ども像について、9年間を見据えた目標の設定が大切であり、そのためには、小中の職員間の交流を定期的に行い、互いに子どもについて情報交換する時間を設けることが大切だと感じました。
- ・小・中学校の教員が改まらず気軽に話し合えるような場の設定ができるといいと感じます。

図11 小中連携通信の感想(小中連携振り返りシートより)

イ 持続可能な小中連携を実現する仕組みについての実践と考察

研究協力校の教職員がR－P D C Aサイクルを進めることによって、持続可能な小中連携となるよう実践に臨んだ（図 12）。実態把握と小中連携の目的を共有するために実施した質問紙調査と小中一貫教育の概要説明を兼ねた校内研修後、「前期小中連携部会」を開催した。6月の教頭・教務部会①では、1年間の小中連携の見通しをもつための話し合いを行い、その後実施した各部会では、各校の情報交換と小中学校で連携できそうな活動について検討した。7月に行われた教頭・教務部会②では、各部会から挙げられた意見を基に実践内容を決定する予定でいたが、事前質問紙調査で連携することの負担感が課題として挙げられていたことや今年度が連携推進の1年目であることから、実践内容の決定については改めて検討することとなった。その結果、教職員の負担感が大きくなり、持続可能な取組とするという視点を重視し、教頭・教務部会で実践内容を決めるのではなく、それぞれの部会で実践内容を決定し、「一部会一実践」の連携活動が進められることとなった。

10月の「後期小中連携部会」では、各部会で行われた連携活動についての振り返りと、これから実践する連携活動の確認を行った。「一部会一実践」を目標とした小中連携の取組だったが、どの部会も複数の実践について振り返りや今後の確認が行われた。

「前期小中連携部会」で行った各校の情報交換が小中連携を推進するきっかけとなり、担当者同士ですぐに連携を進められたことや、教頭・教務部会が「一部会一実践」の取組を各部会に提案する際に、無理なくできることから実践していこうと投げかけたことで、教職員の主体的な取組につながったことが考えられる。各部会を中心に実践された連携活動と振り返りについては以下に示す（図 13、14、15、16）。

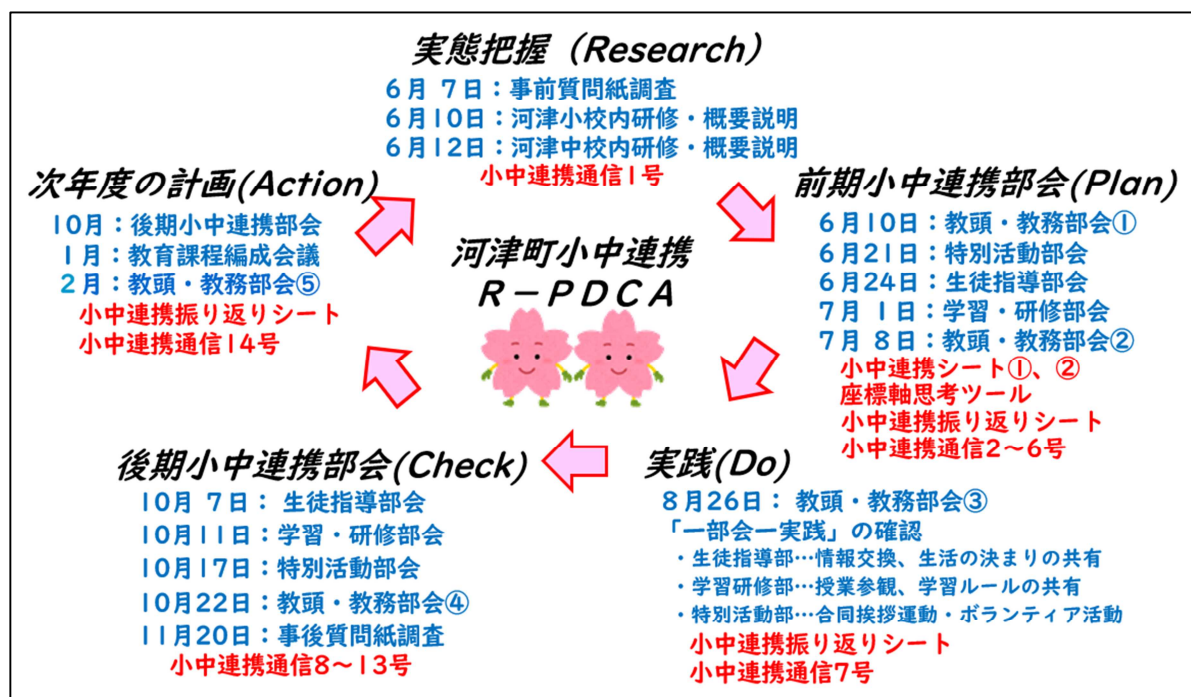


図 12 小中連携 R-P D C A サイクル

【学習・研修部の取組】

授業ルールの確認（前期小中連携部会）

- ・共通している部分が多かったことが確認できた。
- ・入学説明会の時に、毎年、6年生は中1の授業の様子を見学している。元気に発言したり、主体的に授業に参加したりしている様子が伝わり、児童に安心感を与えていて良い。入試を控えた中3の生徒が集中して授業に取り組んでいる様子も見せてあげられると更に良い。

タブレット使用についての決まりを共有

- ・小学校で児童・保護者に配付しているものを中学校でも活用させてもらった。
- ・データをもたらえたので、多少文言を変更した程度で中学校版が作成でき、ありがたかった。

公開授業日の連絡

- ・校務支援で気軽に連絡を取り合えた。 ・中学生が主体的に取り組んでいる様子が見られた。
- ・自分たちで課題を見つけて取り組んでいた。 ・これまでの学びの積み重ねが感じ取れた。
- ・言葉からイメージを共有する点について等、5・6年生の授業の参考になりそう。
- ・10月11月についても情報を確認し合うので参観者が増えると良い。

中学校のテストの受け方について児童に紹介

- ・6年生は、中学進学に向けて意識させることができた。
- ・2年生では落ちた物を勝手に拾わない。時間いっぱい取り組む等、意識を高めることができた。

中学生の自学（家庭学習）の様子やテスト計画表を小学生に紹介

- ・6年生に、中学に向けた学習への意識をもたせることができた。

図 13 実践の振り返りと今後の確認（学習・研修部：後期小中連携部会より）

【特別活動部の取組】

中学合唱コンクールの録画データを渡す

- ・中学生の合唱を聴いてもらう良い機会なので、次年度は参観してもらえると良い。

部活動について中学生に聞きたいことの質問紙作成（11月実施）

- ・部活動について関心をもつとともに、入学後の不安解消につなげたい。

小学生の質問への回答と、部活動紹介ムービーの作成（12月実施）

- ・小学生の質問に回答することで、6年生が安心して中学に入学できる環境をつくる。
- ・生徒会を中心に部活動紹介ムービーを作成することで自治力や自尊感情を高める。
- ・アンケートに見学の要望があれば、土日の活動日で自由見学日や自由参加日の設定を検討する。

河津小フェスタの中学校職員（特活、生徒会担当等）参観（2月25日：5校時実施）

- ・小学生の活動の様子を知ること、中学生の行事等の指導に生かす。

図 14 実践の振り返りと今後の確認（特別活動部：後期小中連携部会より）

【生徒指導部の取組】

児童生徒の情報交換

- ・入学前に引き継ぎは行われているが、実際に生徒の顔が分かってから実施したことで、生徒理解が深まった。
- ・6月に改めて情報交換を行ったことで、中学校からの情報提供や質問もでき効果があった。
- ・次年度も6月に連携部会を実施し、児童生徒の情報交換を継続していきたい。

※R6の小6担任も可能であれば参加する。

学校生活のきまりや長期休業中の生活指導の共通理解

- ・前期に生徒指導部会で情報共有したが、全職員が共通理解しておくことが大切なので、冬休みの生活の心得と共に、小中それぞれの決まりを、全職員で確認する。
- ・異校種の学校生活の決まりについてこの時期に改めて確認することで、次年度の指導計画作成の参考となる。

特別支援学級交流会に向けた準備（はじめの会の司会と風船バレーの練習）

- ・当日、堂々と司会の運営ができた。・仲を深めた状態で10月3日の交流会に望めた。
- ・今年度初めての取組だったが、1回でも十分効果があったので来年度も実施したい。

6年生への部活動入部希望調査（12月実施）

- ・部活動の地域移行化が進められクラブチームの中体連参加も認められている中、事前に中学校の部活動の様子を6年生の児童と保護者に伝え、希望や質問等を確認しておくことで、入学後の業務の効率化を図る。

図 15 実践の振り返りと今後の確認（生徒指導部：後期小中連携部会より）

【教頭・教務部の取組】

教頭・教務部会の定例化(6/10、7/8、8/26、10/22、2/21)

・回数を増やしたことで情報交換や確認等が丁寧にできた。

・次年度も今年度並に教頭・教務部会を行う。

一部会一実践の提案を各部会へ要望(8/26)

・どの部会も負担の少ない所で連携を検討してくれたので良かった。

・次年度の部会の持ち方、連携の仕方等、事後アンケートや学校評価をもとに検討し、2月の部会で決定する。

週報への公開授業日の掲載

・気軽に授業や行事を見にいけるよう呼びかけていく。

・参観に行くことが業務の負担にならないよう！時間全て参観しなくても良いことを伝える。

小学校で遊ぶ生徒への対応

・17時以降は帰宅を促すことを部会で共有し、中学でも生徒に指導してくれたことで、中学生への声かけがしやすくなった。使用前に挨拶に来る生徒も増え職員室で好評だった。

図 16 実践の振り返りと今後の確認（教頭教務部：後期小中連携部会より）

「後期小中連携部会」では実践の振り返りの後に、今年度の小中連携の振り返りと次年度の取組について検討を行った。

今年度の小中連携の振り返りでは、「お互いの活動を知れて良かった。」「できる所で連携し、気付けたことがあって良かった。」「負担なく連携できた。」等の肯定的な意見が挙げられた。次年度に向けた意見や提案では、「今年度並みに次年度も連携部会を行えると良い。」「公開授業参観後に簡単な意見交換の時間を持ち、専科の視点で意見をもらえると良い。」「一貫校になるのであれば9年間の学びの姿を揃える必要性がある。」等、次年度も小中連携を推進していこうとする教職員の意見が得られた。そのほかにも「町や教育委員会からの情報も共有する機会がもてると良い。」「町の目指す子ども像の実現に向け9年間を見通して河津の子どもを育てていくという目的を明確にし、小中学校の連携を推進していく。」といった意見が挙げられた。

来年度実施したい小中連携の取組については、今年度実施した内容を無理なく継続して取り組むという意見のほか、小中学校全体で顔合わせ会の実施や道德・総合的な学習の時間の全体計画の共有、幼小中合同引き渡し訓練の実施等、新たな連携内容も提案された。

今年度の振り返りや次年度に向けての話し合いで、これらの意見が挙げられた要因には、小中連携部会を中心にR-PDCAサイクルを進めたことで、小中連携部会参加者が、次年度の連携をより効果的に進めていこうという意識や小中連携を教職員全体へ推進していこうとする意識が高まったことが考えられる。特に意識した取組として、小中連携が教職員の主体的な取組となることを目指し、「前期小中連携部会」において小・中学校で連携できそうなことについて検討した意見を基に、連携部会参加者が実践内容を決定し、小中連携を推進したことが挙げられる。その結果として「後期小中連携部会」で行った今年度の振り返りや次年度に向けての提案で、教職員から主体的な意見が挙げられたことは、小中連携部会を立ち上げ、各部会を中心に小中連携を推進したことの有効性が考えられる。今年度の小中連携の振り返りや次年度の提案については以下に示す（図 17、18、19）。

- ・**お互いの活動を知れて良かった。**
- ・知らなかったことが多かったが連携部会で分かったので良かった。
- ・**できる所で連携し、気付けたことがあって良かった。**
- ・**負担なく連携できた。**
- ・研究の機会を通して、教頭・教務部会が定例化して良かった。
- ・行事の日程が重なり小学生を合唱コンクールに招待できなかった（R7の計画時に確認）。
- ・**今年度並みに次年度も（6月、10月に2回程度）連携部会をできると良い。**
- ・4月、5月に職員の顔合わせの会を行えると良い。
- ・**公開授業参観後に簡単な意見交換の時間をもち、専科の視点で意見をもらえると良い。**
- ・**一貫校になるのであれば9年間の学びの姿を描える必要がある。**
- ・学習面における子どもの共通理解、全国学力学習状況等調査の分析を元に指導主事も交えて意見交換を行うことで、河津の子供をどう育てるか共有できると良い。
- ・合唱コンクール（6年生）、青春交流（小職員）、河津小フェスタ（中職員）の参観がしやすい年間計画を作成する（職員の参観については特活担当等）。
- ・町や教育委員会からの情報も共有する機会がもてると良い。
- ・**町の目指す子ども像の実現に向け、9年間を見通して河津の子供を育てていくという目的を明確にし、小中学校の連携を推進していく。**

図 17 小中連携の意見や反省（後期小中連携部会より）

- （学習・研修部） 良い物を共有し、授業参観等、今年度やった連携を無理なく継続する。
- （生徒指導部） 情報交換を大切に、児童生徒の指導に生かすとともに業務の効率化を図る。
- （特別活動部） 小中学校で行っている特別活動を理解し、自校の活動をより充実させる。
- （教頭・教務部） 町が目指す子ども像の実現に向け、小・中学校の教職員が9年間を見据えて河津の子供を育てていく。

図 18 令和7年度の小中連携で目指す教職員の姿（後期小中連携部会より）

- （学習・研修部） ・**R6に実践した連携の継続**（授業参観、自学・テスト計画表の紹介等）
・**道徳・総合的な学習の時間の全体計画の共有**
・ICTを活用した資料のやりとり等は端末変更後のR8以降に可能であれば実施
- （生徒指導部） ・児童生徒の学校生活についての情報交換（3月、6月、10月）
・学校生活のきまりについて共有 ・6年生への入部希望調査
- （特別活動部） ・R6連携の取組の継続（教職員の行事参観、部活紹介動画）
・**幼小中合同引き渡し訓練**（9月） ・合唱コンクールへの6年生招待
・部活動の自由見学日や参加日の設定
- （教頭・教務部） ・事務局を教頭・教務部とする（主担当となる教頭を、年度ごと交代する）。
・小中連携通信の代わりにICT（掲示板）を活用し小中連携の共有をする。
・教頭・教務部会の定例化（5月、7月、10月、2月の年4回実施）
・**小中全体での教職員顔合わせ会**
・部会の日程については教育課程編成会議をもとに2月の教頭・教務部会で決める。

図 19 令和7年度に実施したい小中連携（後期小中連携部会より）

ウ 事後質問紙調査と分析

事前質問紙調査に回答した研究協力校の小・中学校教職員 34 人を対象に、11 月に事後質問紙調査を実施した。6 月と同様の質問に、意識の変容を問う質問を追加した。6 月との比較において特徴的なもののみ示した（図 20）。事前質問紙調査で肯定層の値が低かった「③私は今年度、小中連携に意欲的に取り組んだ。」という項目において事前と事後を比較したところ、回答分布が有意に高くなった（Wilcoxon 符号付き順位検定、 $p < .05$ ）。また、「⑩小・中学校で連携することは、教職員にとって負担である。」という項目では、回答分布が有意に減少した（Wilcoxon 符号付き順位検定、 $p < .05$ ）。これらのことから、今年度の実践を通して小中連携への推進意欲が増したことで、小中連携への負担感が事前に感じていたものより低くなったことが言える。

「⑪小（中）学校の教職員の実践やアドバイスを授業実践に生かした。」「⑫小（中）学校の教職員の実践やアドバイスを生徒指導に生かした。」「⑬小（中）学校の教職員の実践やアドバイスを特別活動に生かした。」という質問項目においては、回答分布に有意な増加傾向が見られた（McNemar 検定、 $p < .05$ ）。このことから、「小中連携部会」で行われた情報交換や「小中連携通信」による各部会の情報共有、授業参観、連携活動等が小・中学校の教職員の指導の改善に役立ったことが言える。

事後の調査で追加質問した「⑭小中連携の推進について年度当初より意識が高まった。」という質問項目では 88.2% の教職員から肯定的な回答が得られた（図 21）。意識が高まった要因について選択形式（複数回答可）の質問をしたところ、「小中連携通信」19 人、「小中連携部会」15 人、「小中連携活動の検討」14 人、「一部会一実践の取組」10 人、「小中一貫教育の概要説明」7 人、「小中連携振り返りシート」2 人となった。意識が高まった要因に「小中連携振り返りシート」の回答は少なかったが、「小中連携振り返りシート」に挙げられた感想や意見を、「小中連携通信」で教職員全体への共有を行ったため、有効であったと考えられる。

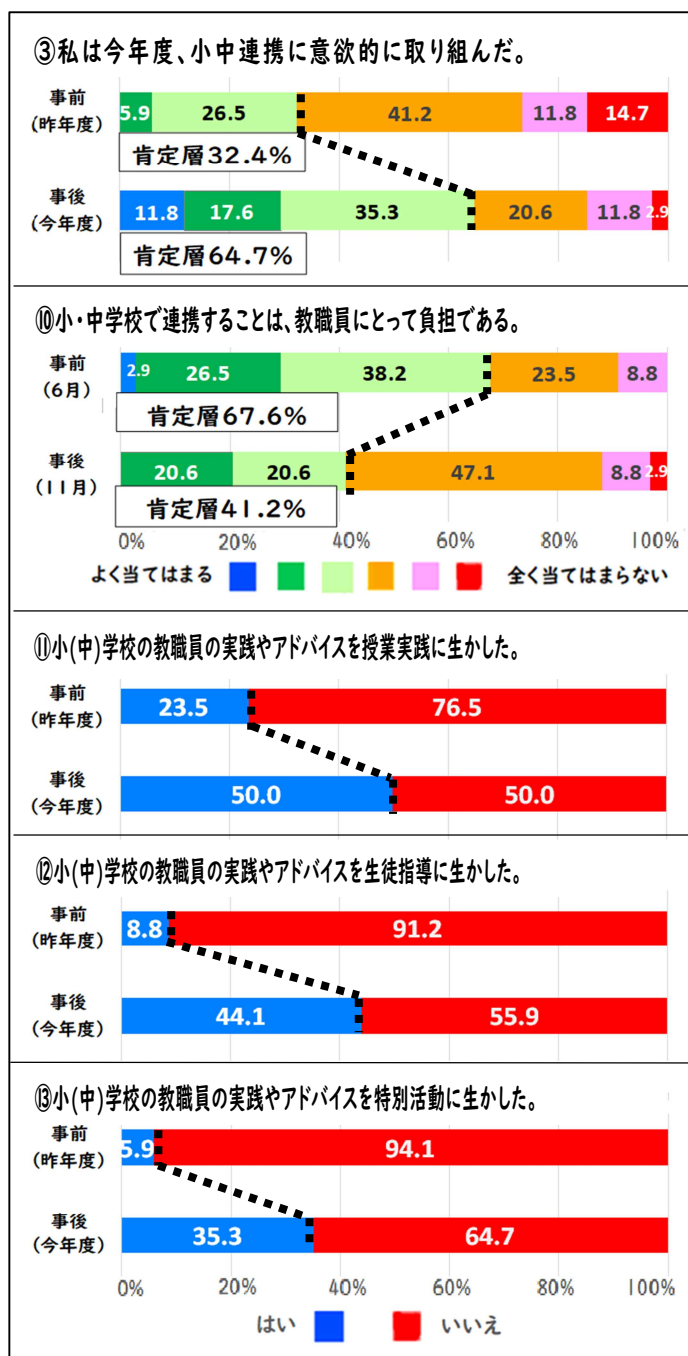


図 20 質問紙調査結果の比較 [N=34]

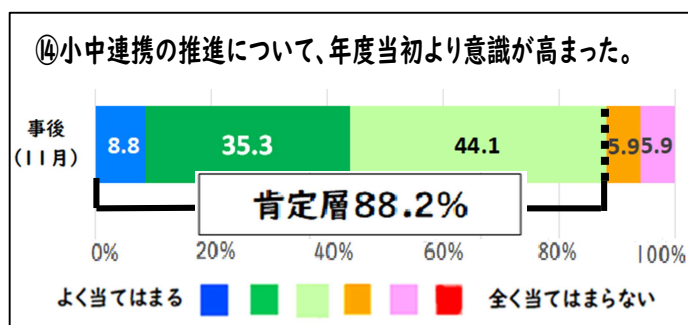


図 21 事後質問紙調査の結果
(小中連携の意識) [N=34]

以上の結果から、小・中学校の全教職員と情報を共有しながら「小中連携部会」を中心にR－PDCAサイクルを進めたことが、小中連携の推進意識を高める要因になったと言える。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

今年度の研究の成果として以下に挙げるア・イ・ウより、小中連携の意識を高める組織となったことが推察される。

ア 小・中学校全教職員で小中連携の目指す方向性を共通目的として共有したことが、小中連携の推進につながり効果的であった。具体的な取組は、職員研修による小中一貫教育制度の概要と町の動向等の情報共有、前後期2回の「小中連携部会」、「小中連携通信」で共有した部会や実践の様子及び「小中連携振り返りシート」に挙げられた意見の可視化である。

イ 両校の事前検討をまとめた小中連携シートを参考に、「小中連携部会」で実施可能な連携について話し合ったことが、教職員の主体的な取組を促し有効であった。

ウ 小中連携についてR－PDCAサイクルを進めたことで、小・中学校の教職員が連携活動や情報を交換することの良さを感じ、小中連携への協働意欲を高めることができた。

(2) 今後の研究課題

ア 今年度の成果を次年度に生かし、持続可能な小中連携について検討を続けるとともに、グランドデザインや研修計画の中に、町が目指す子ども像の実現につながる小中連携の視点を取り入れる。

イ 町が目指す子ども像の実現に向けて、本研究の成果が児童生徒の成長にどの程度寄与したのか検証するとともに、小・中学校の全教職員で児童生徒の成長について語り合う場をつくる。

参考文献

- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告知)解説 総則編」
- ・文部科学省 中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」
- ・文部科学省(2016)「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」
- ・教育再生実行会議 第5次提案(平成26年)
- ・チェスター・バーナード(1963)「経営者の役割」(新訳版)ダイヤモンド社
- ・中川英貴(2017)『今、学校に求められるカリキュラム・マネジメント力 学校改善へのR－PDCA』樺歌書房